



学校名:千葉県船橋市立塚田小学校

氏名: 高橋 千尋

[担当教科:小学校全科]

- 実践教科等: 総合的な学習の時間
- 時間数 : 18 時間
- 対象生徒 : 第5学年
- 対象人数 : 37 人

1 単元名

世界とつながろう

2 単元の見目

- ・世界の国々と自分たちの習慣や文化、価値観を比較することで、共通点や相違点を見付け、世界の国々への興味関心を高める。(多面的・総合的に考える力)
- ・世界の中の日本の役割について理解し日本が重要な役割を果たしていると共に、世界の国々はお互いに助け合っていることに気付く。(つながりを尊重する態度)
- ・モンゴルを始めとする世界が抱える問題を知り、自分自身にできることを考える。(進んで参加する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・世界の国々と日本には、習慣や文化、価値観に共通点や相違点があることに気付く。【多様性】
- ・世界中の人々は互いに関わり合っていることを理解する。【相互性】
- ・JICA のモンゴルに対する支援を知り、「支援」の在り方について考える。【連携性】
- ・世界の国々の「違い」を理解した上で、世界の問題に対して自分自身にできることを考える。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元では、世界の国々の習慣や文化を知ることで、その違いに気付き異文化を認めると共に自国文化についても誇りを持ち、世界各国の人々と共生していこうとする態度を養うことをねらいとしている。

単元は三部構成で学習を進める。第一部「日本と関わりの深い国を調べよう」では、社会の教科書で名前が挙がる、中国・韓国・ロシア・ブラジル・オーストラリア・サウジアラビアを取り上げ、グループ毎に調べ学習を行って新聞づくりを行う。まずは世界の国々の衣・食・住と日本との関わりを調べることで、世界の国々と日本では様々な共通点や相違点があることに目を向けさせる。

第二部「世界で起きている問題について考えよう」では、モンゴルを例に発展途上国の現状や JICA の取り組みを知る。ここでは、問題の解決策を追究するだけでなく、習慣や文化が違えば「問題」の捉え方や「豊かさ」「幸せ」の価値観が違ってくることに気付かせたい。

第三部「ぼく・私が考える国際理解」では、学習したことをもとに実際に身近でどんなことができるのかを考え、実践していく。

(2)児童観

本学級の児童は、1年生の時から外国語活動に取り組み、週に1時間の ALT との英会話やゲームに意欲的に取り組んでいる。また、外国籍の保護者がいる児童や海外へホームステイしたことのある児童がいることで、世界には多様な文化があるという認識やそれを「知りたい」と意欲の高い児童も多い。

その一方で日本の良さはどこかという問いに対して、言葉を詰まらせてしまったり、世界に貧しい国があることを知っていても発展途上国の実情や JICA の取り組み等を知らなかったりする等児童によって知識の偏りがある。

(3)指導観

国際社会に生きていく子供たちにとって、広く世界に目を向け、外国や外国の人々に関心を持ち進んでコミュニケーションを図り仲良くしようとする気持ちを育てることは重要である。

5年生の社会の学習では、他国からの輸入によって保たれている現在の日本の食糧事情や、工業製品の貿易で他国との繋がりに気付くことができる。しかし、通常の学習の中では、教科書を読み取ったり教員の話の聞いたりして学ぶので、児童にとって世界の国々を身近に感じる実感を伴った学習にできることは多くない。

今回の単元の特徴は、教師海外研修で教員が実際に体験したことや現地の写真・動画を教材としている点である。まずは私自身が体験してきたことを語り、児童の興味や関心を高めたい。

そして、モンゴルへ行って学んだ、国際理解のためにはまずは「相手のことを知ること」、「違いを認めること」「自分自身や自国のことを好きになること」が基礎となることについて本単元を通して児童にも考えさせたい。

児童の想いを大切に、振り返りを適宜行いフィードバックさせながら、自己の意識を保たせたり変容に気付かせ意欲化を図ったりする支援に努める。

5 評価基準

観点	よりよく問題を解決する資質や能力	学び方やものの考え方	主体的、創造的、共同的に取り組む態度	自己の生き方
評価規準	世界の国々の習慣や文化について、目的や相手に応じて自分が伝えたい情報を選択してまとめ、伝えようとしている。	発展途上国の諸問題について表現するためにどのような方法が適しているか考えている。	世界の国々について関心を持ち、その中でも発展途上国の現状について考えようとしている。	習慣や文化の違いを理解し、相手の立場に立って考え行動することの大切さに気づき、自分ができていることを考えて実践している。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート 新聞	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート

6 単元の構成

時 限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1 ～ 5	日本と関わりの深い国を調べよう	○日本と関わりの深い国を調べることで日本の習慣や文化との共通点・相違点を見付け、世界の国々に興味・関心を持つ。	1 調べ学習 (本・インターネット) 2 新聞作り 3 発表会
6	世界がもし100人の村だったら『幸せ』って何だろう？①	○世界の国々や民族の多様性と世界の貧困、教育格差等に気づき自己の「幸せ」「平等」について考える。	1 「あなたは幸せですか？」 2 100人村クイズ
7	海外で活躍する日本人	○青年海外協力隊で発展途上国で活躍してきたゲストティーチャーの話から、「国際理解・国際協力」とは何なのか考える。	ゲストティーチャー 「世界で活躍する日本人」 マラウイについて知る
8	モンゴルについて知る「もしぼくたち・私たちがモンゴルに生まれたら」	○モンゴルを例に、人々の習慣や文化について知り、異文化への興味・関心を高める。	1 モンゴルクイズ 2 モンゴル語講座 3 モンゴルじゃんけん
9	私たちの生活の問題・モンゴルの問題について考える	○どんな国でも様々な問題を抱えていることを知る。 ○世界中の国々は、お互いに助け合って生きていることを知る。	1 日本の生活の問題 2 日本の一大事の時 3 モンゴルの生活の問題 フォトランゲージ 4 JICA とは？
10	モンゴルの学校	○モンゴルの学校の問題点を取り	1 モンゴル学校クイズ

	「もしぼくたち・私たちがモンゴルに生まれたら『幸せ』って何だろう②」	上げ、JICA がどんな支援をしてきたかを知る。 ○モンゴルの人々は「幸せ」かを考える。	2 日記から考える 3 ビデオ・JICA の取り組み（学校） 4 モンゴルの小学生の「幸せ」
11	エルサルバドルについて知る	○エルサルバドルの人々の習慣や文化について知り、異文化への興味・関心を高める。 ○これまで学んだマラウイ、モンゴルと比較する。	1 エルサルバドルってどんな国？ 2 暮らし・食事・学校
12 ～ 18	ぼくたち・私たちが考える国際理解	○発展途上国や世界の問題のために、何ができるか活動計画を立て、実践する。	1 ぼくたち・私たちにできることって何だろう

7 授業事例の紹介

小単元名【もしも、ぼく・私がモンゴルに生まれたら『幸せ』って何だろう？】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月9日(月)第4限

(イ)実施会場 5年3組教室

(ウ)本時の目標

○モンゴルの学校の問題点について、自らの考えをまとめることができる。

○既習事項をもとに、多様な習慣や文化、価値観の違いに気づき、異文化を理解しようとしている。

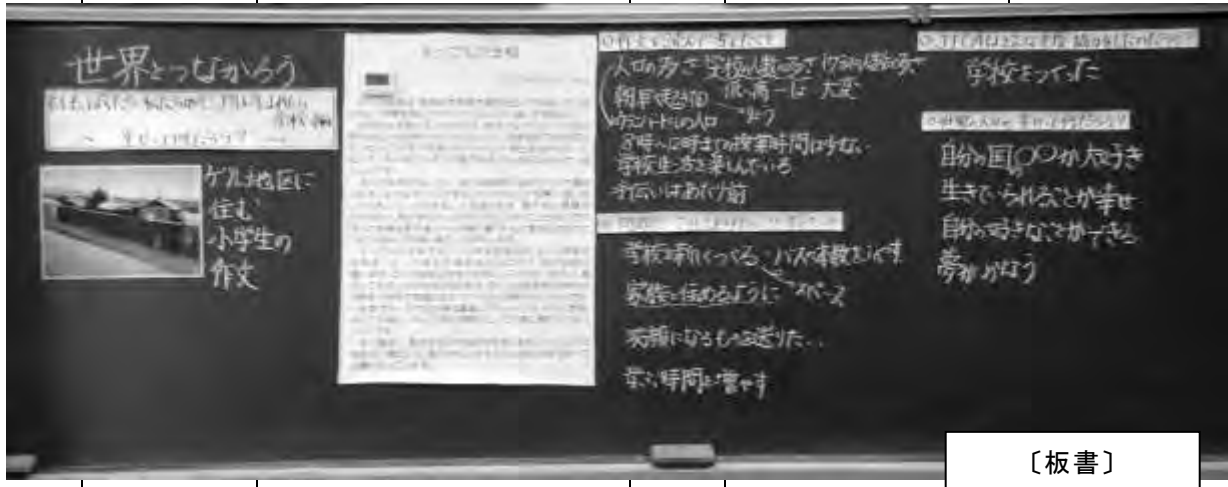
(エ)指導のポイント

・モンゴルの小学生の日記をもとに、モンゴルの教育の問題に目を向ける。ビデオで JICA の支援を知り、モンゴルの小学生は『幸せ』かを考える。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	モンゴル学校クイズを行う。 学習課題を提示する。	 〔前時までの振り返り〕 ○モンゴル学校クイズを行う。	一斉	・モンゴルの学校を身近に感じられるよう、日本の小学校と比較できるようにする。	 〔クイズ〕
もしも、ぼくたち・私たちがモンゴルに生まれたら～幸せって何だろう～					
展開 30分	モンゴルの小学生の日記からモンゴルが抱える教育の問題に目を向ける。 JICA のモンゴル支援ビデオを紹介する。 モンゴルの	○日記を読んで、モンゴルの学校の問題点や気付いた所についてグループで討議する。 ○JICA はモンゴルの子供たち(学校)にどんな支援をしたのか知る。 ○モンゴルの小学生の生活	班 一斉 個人	・ワークシートに討議した内容を書き込めるようにする。  〔グループ討議〕 ・モンゴルの小学生	・モンゴルの学校について関心を持ち、モンゴルの教育の問題について考えようとしている。 (学習の様子 発言 ワークシート)

まとめ 5分	小学生は「幸せ」かを考える。 通訳のツェンさんの「幸せ」について知る。 本時の学習をまとめ、次時の学習の予告をする。	を知り、モンゴルの小学生は幸せかを考える。 ○通訳のツェンさんの考えと自分の考えとを比べて、考えを深める。 ○本時の感想を書く。	個人 個人	になりきって考える雰囲気作りをする。 ・明確な答えがあるわけではなく、モンゴルの学校の実情を知った上で、相手のことを理解しようということが大切だということに気付かせる。	
-------------------	---	---	---------------------	--	--



〔板書〕

(2) 授業の振り返り

〔成果〕

- ・導入クイズを行ったことで、本時で何をテーマにしていくかがわかりやすかったようだ。また、児童にとって身近なテーマを取り上げたため、グループ討議で多くの意見交換をすることができていた。
- ・単元を通して住む国が変われば住んでいる人の「当たり前」や「価値観」は異なることに触れてきた。学習が進むにつれてそれが生かされ、多様な文化を認めようとする児童が増えた。
- ・現地で購入した品物や、実際に撮影してきた写真を教材として使用したり、教員が体験してきたエピソードを語ったりしたことが他の何よりも児童の興味・関心を高めた。

〔課題〕

- ・1時間の学習の中で、「学校の問題」と「幸せ」について考える盛りだくさんの内容となってしまった。教員側が収集してきた情報をどのように活用するかで児童への伝わり方が大きく変わるため、情報を精選しねらいを絞ることも必要だった。
- ・児童の発言を、どのように評価していくかが難しかった。今後の課題としていきたい。

(3) 使用教材

- モンゴルの民族衣装の帽子やゲルの模型等モンゴルで購入してきた物
- モンゴルクイズのスライド(一部)



○モンゴルの小学生の作文（JICA モンゴル・通訳の方へのインタビューをもとに作成）

モンゴルの学校

○○○○ ○○○○

○ぼくの家族は、昨年まで草原で遊牧民として生活していたけれど、仕事を探してウランバートルに引っ越して来ました。

お母さんが話していたけれど、地方からウランバートルに移り住む人は毎年3～4万人くらいいて、15年前までは65万人だった人口が今では国の40パーセントを占める130万人になって、その多くがぼくの家があるゲル地区に住んでいるらしいです。

近くに学校がないから、ぼくは朝早く起きてバスで通学します。なかなかバスが来なくて、冬はとても寒い思いをしたりちこくしたりすることもあります。登下校に時間がかかるから、家に帰ったらつかれてしまうことも多いです。ぼくの友達の家が遠いから学校に通うために家族とはなれて、リょうに住んで学校に来ている子もいます。

モンゴルの学校では、1～5年生が低学年、6～9年生が中学年、10～12年生が高学年とよばれて、同じ学校に通います。ぼくの学校は全校で2000人子供がいます。人数がとても多いから学校は3部制で、ぼくたち低学年は8時から12時まで学校で勉強します。1クラスの人数は50人くらいです。給食でポーズが出た時は最高にうれしいです。それに学校はとても楽しいから、下校の時間になっても家に帰りたくないくらいです。

家に帰ると、家の手伝いや妹の世話をします。モンゴルでは家族の一員として、家の手伝いをするのは当たり前でぼくの日課となっています。

○モンゴル人の通訳の方のインタビュー動画

(4)参考資料等

- ・『地球の歩き方 2015～16』ダイヤモンド社 2015 年
- ・JICA モンゴル事務所 広報用動画「モンゴルの初等中等教育に対する JICA の協力」

8 単元をととした児童の反応/変化

事前に児童にモンゴルという国を知っているかと聞いた所、ほとんどの児童が知らなかった。これからモンゴルのことを学習すると伝えた時どんな国なのか検討もつかなかった児童たちは、学習を進めていくうちに日本と似ている所、違う所をたくさん見つけて多くの驚きや発見があったようだ。驚きや発見を積み重ねていくことで、モンゴルに親しみを抱く児童が増え、日本に近い身近な国となっていっているのを授業していく中で私自身も強く感じる事ができた。

以下に児童の単元を通しての感想を紹介する。(一部抜粋)

○私はモンゴルなんて興味がなかったけれど、先生の話聞いてモンゴルはこんな国なんだとかモンゴルと日本にも似ている所があるんだとかを知って、もっとモンゴルについて知りたいと思った。モンゴルに関する物を先生が買ってきてくれて触らせてもらえて、とても楽しい授業だった。○モンゴルのことを知った時、場所から考えると田舎なのではないかと思っていた。しかし、モンゴルの中心地のウランバートルのあたりは写真で見るとビルが建っていて都会のように感じられた。田舎と都会があって面白い国だと思った。

○一番心に残ったのは移動が可能な家「ゲル」。日本と近い国なのに、違う所がたくさんあることに驚いた。

○日本の当たり前が当たり前でない国があることがわかった。

○幸せについて考えて、私もお金がなくても家族がいるだけで幸せなのかもしれない。

○JICA が学校を建てる活動をしていることを初めて知って、すごく勉強になった。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

単元全体を振り返った時に、事前に想定していなかった学習のポイントとなったのは第9時の日本の問題について考えるという授業だ。発展途上国について学習する前に、日本にも抱える問題があって東日本大震災のような際には、世界中から支援・協力をしてもらったことを学習した。

そこで、「世界中の人々は助け合っている」ことに気付き、「困っている人がいたら助ける」という児童の日常にとっても当たりの考えで、JICA の取り組みについてもスムーズに考えることができていた。

このように事前に考えた計画、実際にモンゴルへ行った後の実践、実践中にも常に目の前の児童にとってどのように学習を進めるか思考錯誤の連続だった。授業を実践し、単元を通して授業が

「面白かった！」と答える児童が多かった。様々な文化や価値観に触れ、世界には多くの国があって、その国について「知る」ことが児童にとって刺激があり、とても楽しいことであること、そして何より児童自身の「世界」を広げる大切なことだと考えさせられた。

○本単元における PDCA サイクル

段階	項目
P 計画	① 児童の実態をもとにどのような学習計画を立てればよいか、他教科との関連を考えながら学年で取り組める国際理解の単元を年間計画に入れた。モンゴルでの経験と学校教育目標、小学校学習指導要領をもとに、授業のねらいを設定した。 ① 児童が意欲的に取り組める授業形態を、学級の児童の実態をもとに考えた。
D 実施	① モンゴルへ行く前に、「日本と関わりのある国々」についての調べ学習、モンゴルへ行った後にモンゴルを中心とした発展途上国についてゲストティーチャーを呼んで授業を行っていった。児童の反応を見て、次時の授業内容を検討しながら学習を進めた。 ② 授業の導入では、スライドを用いたクイズをしたり、実際にモンゴルで購入したモンゴル土産を紹介したりした。フォトランゲージ等のグループ活動を多く取り入れた。
C 検証	① 最初に「日本と関わりのある国々」について学習したことで、児童に「これから世界についての学習をする」意識付けをすることができた。実際にその国へ行ったゲストティーチャーに話をしてもらうことで「国の実情」について生の声を聞くことができた。その結果、児童は国や人によって多様な価値観があり、それを知ることが今の自分たちにできることなのだと考えを深めていた。 ② 「モンゴルクイズ」とモンゴル土産は導入として最適で、児童の反応もとても良かった。グループ活動を取り入れたことで、友達の多様な意見に触れることができていた。その反面、課題が難しい場合やグループ活動に慣れてきてしまうと、話し合いが活発に行われないこともあった。
A 改善	① 10 日間の研修で、多くの情報を得ることが出来た。今回使わなかった資料を今後どのように学習に活用できるかを考えていきたい。 ② 課題によって、児童の活動形態を工夫する必要がある。

10 教師海外研修に参加して

JICA モンゴル事務所を訪問した際、所長が『日本的な支援の特徴として、モンゴル側のパートナーと一緒にやっていく、一方的な支援ではなく我々もモンゴルの人たちから学ぶことで本当のパートナーになる』とおっしゃっていた。それを聞いて、モンゴルの人たちが研修先で私たちに好意的に接してくれたのは、これまで私たちが知らない所で JICA が地道な活動の中でモンゴルとの関係を築いてきたからだと思った。モンゴルの人たちの「モンゴルを良い国にしたい」という熱意を感じて、私は授業でそれを児童に「伝えたい！」と強く思った。教師海外研修に参加して多くのことを学んだが、一番は自らの経験を「語れる」向上心を持ち続けられる教員でいたいと強く思えたことが、研修後の自分の教員としての働きぶりに大きく影響している。

今後も研修で出会った仲間と情報を共有しながら国際理解教育について学び、児童が将来「世界で活躍したい、もっと様々な国々について知りたい」と思える授業を考えていきたい。